

### 3.29 時は春

朝から、とってもいい天気です。

空は晴れわたって、鳥が鳴いて、庭の花は出番！？ って顔しています。

The year's at the spring,	時は春
And day's at the morn;	日は朝
Morning's at seven;	朝は七時
The hill-side's dew-pearl'd;	片岡に露満ちて
The lark's on the wing;	揚げ雲雀名のりいで
The snail's on the thorn;	蝸牛枝に這い
God's in His heaven--	神、空にしろしめす
All's right with the world !	なべて世はこともなし

のっけから、英詩を出すなんて、何だ！

フン、気分ワルーと言う声が聞こえてきそう。

でも、もう（おそらく）長い間、イヤな英語とは縁を切っている方々も、  
こういう英詩なら、あ、いいかも って思ってくれるかも知れないと期待しつつ。

これ、ブラウニングの詩を上田敏が訳したもの。  
最後のフレーズ、聞いたことありませんか？

私、今日のような晴れた春の空を見上げると、一昨年までは、この詩が浮かんで、何か幸せな気分になったものです。

ちょっとイヤな出来事があっても、「なべて世はこともなし」といえる朝が来るとするのは、何と素晴らしいことだったかと、今では思います。

しかし、去年の春は、大変悲しい春でした。桜の花までが哀しんでいるように見えました。

今、一年が経って、二度目の春がめぐってきましたが、ほとんど復興は進まず、大勢の方がまだ被災から抜け出せずにいる中では、とても「なべて世はこともなし」なんて気にはなれません。

東京の桜の開花は、明後日 31 日だそうです。

今年は、去年と違って、桜の花が悲しく見えることはないと思いますが、それでも、まだ、桜の春を心から喜ぶまでにはいかない気分です。

「年々歳々 花相似たり 歳々年々 人同じからず」

これは、現世の儂さを詠った昔の中国の詩人劉廷芝の歌の有名な一節ですが、桜の季節になると、この一節はよく引用されます。



前にも書いたことがあります。実はこの詩、桜ではなく、桃の花を歌ったものなのです。でも、日本人には、この詩の中の「花」は、桜の方がふさわしく思えるのですね。

次に掲げるのは、その中の一節。

已見松柏摧爲薪 已に見る松柏摧(か)れて薪と爲るを  
更聞桑田變成海 更に聞く 桑田變じて海と成るを  
(美しい松柏が、枯れて薪となり、緑なす桑畑がいつしか海に変わることもあると聞く)

古人無復洛城東 古人また洛城東に無く  
今人還對落花風 今人また落花風に対す  
(かつて洛陽城東の花を愛でた人々は既に亡く、今こうして我ら花散るを見る)

津波の後に咲いた桜には、やはり、諸行無常を感じてしまいそうです。

さて、現実に戻れば、4月から新学期。

ああ、まだ準備ができていないなあ。  
今年は、花見どころでないかあ。トホホ。  
現実、やっぱり厳しいー。

## 4.1 染井吉野

昨日、東京の桜の開花宣言がありました。

正確に言うと、「さくらの開花」ではなく、「染井吉野の開花」なのですが、そんなことを言うと何いってんのと言われるくらい、わが国の桜は圧倒的に染井吉野になってしまっています。

今、日本に植えられている桜のうち8割は、染井吉野だそうです。

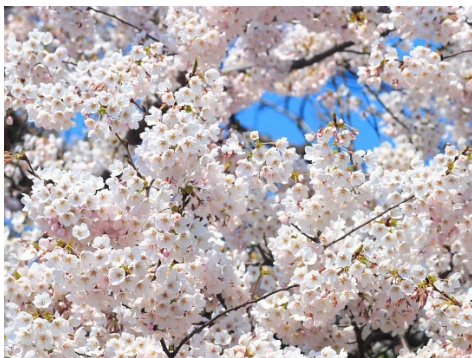
この桜、江戸の末期に、大島桜と江戸彼岸桜を掛け合わせて作られたハイブリッド種であることはご存知かと思いますが、当初「吉野桜」という名前で売り出されたのだそうです。ところが、本家本元の吉野の桜は、実は、その殆どが「山桜」。

紛らわしいということで、作られた土地である染井村の染井をかぶせて「染井吉野」となったのだものの本には書かれています。

今や、染井吉野は、本家の母屋を乗っ取った感じですが、このように全国制覇を成し遂げた背景には、三つの大きな理由があると思われます。

第一は、花の咲きようが豪華絢爛であることです。

染井吉野の花は、葉が出るよりも先に花が咲き、花の密度が高いため、枝全体が花に覆われます。複数の染井吉野が咲き誇ると、天国もかくやと思うほど華やかな景色になり、人の心を浮き立たせます。



第二は、花の散りようが哀れを誘うことです。

染井吉野の花は、咲いているときに豪華なだけに、また咲いている時間が短いゆえに、花吹雪となって散るときに、栄耀栄華は一瞬のもの、という世の哀れを感じさせるものがあり、日本人の心のどこかに触れるのです。



第三は、木の成長が早く、増やしやすという栽培技術上のメリットがあることです。

染井吉野は、ほぼ 10 年ほどで一人前の立派な花を付ける桜の木になり、増やすのに手間がかからないため、どこでも、すぐに桜並木を作ることができるのです。

染井吉野に欠点はないのかといわれると、寿命が短いとされていることでしょうか。

染井吉野の寿命は、一説に人間と同じくらいといわれ、60 年から 80 年くらいようです。まあ、人間にも長寿の人がいるように、100 年を超えるものもあるようですが。

私が、学校を出て初めて霞ヶ関に出勤したとき、地下鉄を出た私を迎えてくれたのは、外務省の桜並木でした。

当時は、まだ、幹の太さも 20 cm くらいの若木で、一生懸命咲いているぞ、と言っているような雰囲気がありました。

これからの社会人としての生活に少し不安を抱いていた私は、懸命に花を咲かせている若い桜にある種の仲間のような感じを持ったことを覚えています。

その桜も、今やおそらく 60 歳を超え、威風堂々、当たりを圧する威厳のようなものを感じるようになりました。

きっと、まもなく、私と前後して、寿命を終える木が出てくるのでしょう。



ところで、桜を歌った歌の代表と言え、**「さくら さくら」**。

最近、日本では歌われることが少なくなったけれど、ヨーロッパで飲んでいると、よく演奏してくれるのはこれ。

オペラ「蝶々夫人」の中で出てくるせいでしょうか、よく知られているようです。

染井吉野を詠ったものは、潔く散るという性格からか、軍歌に歌われるものもあってどうもね、と思っているのですが、最近では、イメージが一新されて良い歌が多くなってきました。

中でも私が特に気に入っている歌。森山直太郎さんの「さくら」

♪ **ぼくらはきっと待ってる 君とまた会える日々を  
桜並木のみちの上で 手を振り叫ぶよ**

どんなに苦しい時も 君は笑っているから  
くじけそうになりかけても 頑張れる気がしたよ

かすみゆく景色の中に あの日の歌が聞こえる

さくら さくら 今咲きほこる  
刹那に散りゆくさだめと知って  
さらば友よ 旅立ちのとき 変わらないその想いを 今

## 4.2 日本の桜の自生種

日本の桜は、染井吉野に乗っ取られたと前に申しあげましたが、日本には約 300 から 600 を超える種類の桜があるといわれています。倍も違うなんて、なんといい加減かと思われるかも知れませんが、これは、栽培品種が急激に増加しているためかと思われます。桜は、日本人と違って、すぐ隣の桜と仲良くなって新しい子供ができちゃうんですね。染井吉野も、栽培品種の一つ。

その中で、日本の固有の自生種は、僅かに 9 種。  
その代表格が山桜（白山桜）です。



山桜には、染井吉野の華やかさはなく、清楚な桜で、本来、人知れずひっそりと山の中で咲くことが多いのですが、吉野の山や長等山の桜は、その例外です。  
平安の昔から歌に詠われていたのは、その殆どがこの山桜です。

私が好きなのは、平家物語巻七「忠度都落ち」の中の平忠度の歌とされているもの。

さゞなみや 志賀の都は あれにしを むかしながらの 山ざくらかな  
(千載集 詠み人知らず)

平家物語を読んだことのある方には先刻御承知のことと思いますので、パスしていただくこととして、お読みでない方のために、そのさわりをお話しさせてもらいたいと思います。

源氏勢が京都に迫り、平家一門が都落ちする中、薩摩の守忠度は、和歌の恩師、藤原俊成の元にとって返し、次のような必死の願いをします。(以下『 』内拙訳)

忠度

『一門の運命は、もはや尽きたように思います。  
かつて勅撰集が編纂されると聞き、生涯の名誉に、一首だけでもと思っておりましたが、世の中が乱れ、勅撰集の話が沙汰やみになってしまったことを今も心残りに思います。  
この後、世の中が静まりましたら、いつかはまた、勅撰集編纂の話が出てくるでしょう。  
この中に、もし、入れるべき価値があると思ってくださるものがあれば、一首だけでも入れていただければ、たとえこの身が死すとも、こころから嬉しく思います。』

俊成から、決して粗略にはしないとの言葉を受けた忠度

『そのお言葉を戴き、今は、西海の底に沈もうと、山野に屍を晒そうと、この世に心残りはありません。さらばでございます。これでおいとま申し上げます。』

と馬にまたがって、西へと落ちていきます。

ややあって、

「前途程遠し、思いを雁山の夕べの雲に馳す」(和漢朗詠集)

という忠度の声が暗闇の中から聞こえてきます。

私には、師に和歌を託して去っていく後ろ姿が、暗闇の先に見えるような気がします。

この後、忠度は、一ノ谷の戦いで義経軍と戦い、戦死します。

その時に、箆(えびら)に残っていた彼の辞世の歌。

「旅宿の花」

行き暮れて 木の下かげを 宿とせば 花や今宵の あるじならまし

その後、世が静まり、忠度の言ったとおり、勅撰和歌集「千載集」が編纂されますが、藤原俊成によって、忠度が残していった歌の中から一首が、「読人知らず」として、そっと入れられたのが、上に掲げた「さざなみや」の歌です。

蛇足ですが、藤原俊成卿の屋敷があったところは、今も、京都の烏丸通り、四条と五条の間、松原通東入りに「俊成町」として名前を残しており、小さな俊成社（俊成さんと言われています）がひっそりと建っています。



どうか、この町の名前とこの忠度の歌がいつまでも残りますように。

さて、この他にも、桜については、紀友則、在原業平、小野小町、行尊大僧正、藤原公経などの歌が知られていますが、やはり、山家集に膨大な桜の歌を残している西行を外すことは難しいでしょう。

ねがはくは 花の下にて 春死なん そのきさらぎの もち月の頃

個人的には、私、この歌、余り好きではないのですが、これはあまりにも有名で外せませんね。

「如月の望月」は、旧暦 2 月 15 日、お釈迦様が入滅した日ですが、西行は、桜の花の下で、お釈迦様が亡くなったのと同じ日に死にたいものだと言っています。これだけだと、「勝手にしたら」というだけの歌に過ぎないのですが、桜狂いの西行、遂に、文治 6 年の 2 月 16 日に河内の国弘川寺で亡くなるのです。執念ですね。

ところで、誰もが思うのが、如月で桜？

実は、文治 6 年 2 月 16 日は、西暦では 1190 年 3 月 23 日。

それでもまだ早い気がします、山桜は、染井吉野より開花が少し早いので、この頃には、満開になっていた可能性もないわけではないと思われます。

最後に、同じ自生種で、染井吉野の親である江戸彼岸桜と大島桜についても簡単に一言。彼岸桜は、お彼岸の頃に咲くことから名付けられたようで、桜の中で一番の長寿。

日本の三大桜とされる「福島の三春滝桜」、「山梨の山高神代桜」、「岐阜の根尾谷淡墨桜」はいずれも彼岸桜で、樹齢は 1000 年を超えています。

彼岸桜は、集団で威力を発揮する染井吉野と違って、孤高の桜という感があり、樹齢 500 年を超えると、例外なく神々しさを感じます。



大島桜は、知名度が低いのが残念ですが、房総半島や伊豆半島のような暖かい地域に自生し、花の色は殆ど白に近い。

明るい陽光の下で見ると、若葉が黄緑のためか、深窓の女性のように、美しく優雅に見えますし、何よりこの桜の花には芳しい香りがします。

ちなみに、この葉は、桜餅の葉になります。



栽培種の桜は、素人の私には、もう手に負えないのですが、白い清楚な花を咲かせる虎の尾、白妙、白雪、駿河台句、紫宸殿、琴平、上句もいいですし、黄色い花を咲かせる鬱金（うこん）、黄緑の御衣黄（ぎょいこう）も変わっていますね。下の写真は、御衣黄。





ちなみに、清酒に「黄桜」という銘柄がありますが、♪カップパッパ、呑んじゃったという  
コマーシャルでご存じと思います。

この酒造会社の初代社長「鬱金桜」が好きで、ついに会社の名前も、お酒の名前も黄桜に  
してしまったのだそうです。桜狂いも、ここまで来ると立派と言えるかも。

伏見の本社の門のところには鬱金桜が植わっています。写真は、黄桜HPから。



## 4.6 花

♪ 春のうらゝの 隅田川 のぼりくだりの 船人が  
櫂のしづくも 花と散る ながめを何に たとふべき

これは、ご存知、瀧廉太郎作曲、武島羽衣作詞の「花」の一番。  
しかし、この曲、殆ど誰もが知っているにもかかわらず、その題名「花」を正確に答えられる方は1割に過ぎないようです。

この「花」は、若き瀧廉太郎が1900年に作った歌曲集「四季」の中の春の曲。  
ちなみに、夏は「納涼」、秋は「月」、冬は「雪」。  
どれも、新進気鋭の作曲家瀧が、わが国の歌曲の世界を変えようとしている心意気が感じ取られる画期的な作品ですが、今日「花」を除いて、聞く機会が極めて少ないことを残念に思います。

ところで、この春の日、隅田川を行き来する舟はどのようなものだったと思いますか？

私のゼミの若い諸君は、  
それは、屋形船とか、笹舟のような平底舟とか、とにかく和船でしょ、と言います。  
歌詞の中で、「のぼりくだりの 船人」と言っていますから、そう考えるのが普通ですよ。

ところが、ここでの舟は、レガッタ（漕艇）ではないかという説が有力なのです。

隅田川では、1883年（明治16年）、東京帝国大学と体操伝習所との対抗レガッタが初めて行われて以来、学生の間でボートレースが盛んになり、1887年（明治20年）一高、高商、高師のレースが行われるなど、ときには岸からの応援が加熱してレースが中止になるという状況が見られたようです。

今も行われている早慶レガッタは、1905年が第1回でした。



この曲が作られた 1900 年当時、春の隅田川を行き来していたのは、実は学生達によるボートで、櫂とあるのは、和船のものではなく、ボートのオールなのですね。

ですから、漕ぐごとに、春の陽光にしずくが輝き、花が散るように飛び散っているのです。確かに、和船の櫂では、余りしずくが飛び散ることはありませんね。

ただ、このフレーズには、元歌が存在するのです。

元歌は、源氏物語のなかの「胡蝶の巻」にある六条院の春の美しさを詠った次の歌。

春の日の うららにさして 行く船は 棹のしずくも 花ぞ散りける

どうですか。

櫂が棹に変わっていますが、似ていますよね。

棹の場合、棹の先を水底に着け、もう一方の棹の先まで手で辿り、再び、棹を引き揚げるという動作を繰り返しますから、棹からは水滴がしたたり落ちるのです。

それが花が散っているように見えるのですね。

♪ 錦おりなす 長堤に 暮るればのぼる おぼろ月  
げに一刻も 千金の ながめを何に たとふべき

これは、「花」の三番の歌詞。

「暮るればのぼる」と言っていますから、このおぼろ月は満月なんですね。

残念ながら、今年の 4 月の満月は、18 日なので、この光景は見られません。

そう考えると、短い桜の花の盛りに、満月が上がるというのは、毎年のように見られると言うわけではないのです。

ですから、このように、「春の宵」、「おぼろの満月」、「桜花の盛り」、それに「大川の流れ」、という光景は、まさに、値千金。

照りもせず 曇りもはてぬ 春の夜の おぼろ月夜に しくものぞなき (大江千里)

ところで、作詞の武島羽衣さん、ここでも本歌取りをしていますね。

「げに一刻も千金の」は、中国の詩人「蘇軾 (蘇東坡)」の「春宵一刻值千金」(春夜)からの借り物です。

でも、借り物であろうがなんであろうが、やはり、この光景は、何ものにも代え難いものには違いありません。

ところで、光景が値千金となると、次は、どうしても花より団子の喩えもありますから、団子。

団子と来れば、墨東向島では、明治元年創業の「言問団子」。

言わずと知れた古今集、在原業平の「名にしおわば いざ言問わん 都鳥 我が思う人はありやなしやと」に因んで付けられた名前ですね。

桜の花びらが散る中で、白あん、小豆あん、味噌あんの三色団子を美味しいお茶を飲みながら食べるのは、お酒を飲めない人にとっては至福の一刻。写真



言問団子の向かいには「長命寺桜餅」の店があります。こちらは創業 270 年を超える老舗中の老舗ですが、桜餅については、葉桜の頃に回します。

ちなみに、今年の早慶対抗レガッタは、4月23日。

葉桜の下、スイープを使うエイトは、ボートの「華」です。

#### 4.10 桜餅

私の家の近くは、風が吹くたびに、満開を過ぎた桜がさぁーっと散り、桜吹雪のまっただ中です。

あと数日で風景は薄桃色の世界から薄緑の世界に一変するのでしょうか。

この葉桜の季節を境に、私は団子から桜餅に乗り換えます。

桜餅は、散っていった桜の名残を惜しみながら、葉桜の緑の下で味わってこそ、美味しいのです。

え、美味しいのには変わりがない？

ま、そうなんですけどね。

桜餅の桜の葉は、ご存じのように、大島桜の葉を塩漬けにしたもの。

大島桜の葉は、染井吉野など他の桜の葉と比べて一回り大きくて包みやすく、薄いのですね。

染井吉野の葉は、桜餅に使えないのかって？

ええ、まあ、採ってみるとわかりますが、葉の裏にとげとげがあって、食べられないことはないかも知れないけれど、普通の人なら食べないでしょうね。

大島桜の花には香りがあるのですが、その葉を塩漬けしますと、葉からも懐かしい香りが出てきます。

昔、調べたことがあるのですが、これ、クマリンという物質の香りのようです。

脅かすわけではないのですが、クマリンは、殺鼠剤として使用されていることからわかりますように、かなりの毒性を持っています。

まあ、毒と言っても一枚の葉っぱの量だと、食べても人間様には、直ちに影響は出てきません。

直ちに？

それ、最近、政府の偉い方がウソを言うときに使いませんか？

いえいえ、放射能ではありませんから。

これは、毎日 10 個ずつ一年間食べ続けると、影響が出ないとは言い切れないという程度のもので。

まあ、一日 1 つ、4 月の間だけでしょ？

遠慮無く、葉ごと食べてください。

古い先短いボクは、平気ですけどネ。

さて、桜餅には、長命寺系と道明寺系の二種類があります。

どこが違うか。

説明が面倒なので、写真を見てください。左が長命寺系、右が道明寺系。



さて、長命寺の桜餅は、以前、桜と団子の話をしたときに出てきました墨東向島の言問団子の向かいにあるお店が元祖。

長命寺というお寺の門番さんが、漬け込んだ桜の葉で包んだ餅を売り出したのが名物となったものだそうです。下の写真は、長命寺の桜餅。



創業が江戸時代中期（1717年）だから、東京では老舗。ちょっと前まで関東で桜餅と言えば、これでした。

元祖は別として、普通は、小麦粉に紅を入れたものを薄く伸ばして焼いたものが皮。

一方、道明寺系は、大阪の藤井寺にある道明寺で作られたものが元祖。

これは、昔々から携帯食料として作られていた糰（乾飯 ほししい）を使ったもの。

もち米を洗って二日間水に漬け、蒸したものを、1ヶ月程度乾燥させて作ると書かれていますが、これを適当な大きさに石臼で轆いたものです（和菓子歳時記から引用）。

本来は戦時食糧で、戦いの合間にご飯を炊けないとき、これを口の中に入れてもぐもぐしていると、次第に柔らかくなってきて喉を通るんですね。

ちなみに、道明寺は、あの菅原道真さんの氏寺で、1300年の歴史を持つ由緒あるお寺。長命寺とは格が違うのです。

道明は、道真さんの号。

古典に詳しい方は、人形浄瑠璃の「菅原伝授手習鑑」に出てくるのをご存じかと思います。

お寺の伝えによりますと、菅原道真さんの伯母さんにあたる「覚寿尼」が初めて拵えたとありますが、これはちょっと？眉唾。

この道明寺系糰は、桜餅だけでなく、椿餅、みぞれ羹にも使われていますから、女性の方にはお馴染みですね。

私は、道明寺系も長命寺系も、分け隔て無く愛していますが、両方食べたことがある人の多くは、道明寺派のようです。

#### 4.12 桜湯

今年は、染井吉野の花が遅かったせいか、八重桜がもう咲き始めています。

八重桜の中には、天平の時代から、奈良の都で咲き誇っていた種が幾つかありますが、その代表的なものが「関山」とか「普賢象」です。

私は、八重桜は、他の桜と比べるとそれほど好みではないのですが、八重桜を塩漬けにした「桜漬け」は好みですね。

私の家から少し西にある秦野市は、この桜漬けの一大生産地で、今では、秦野産の桜漬けは全国の8割強を占めているそうです。

桜の種類は、里桜に属する八重桜の「関山」。



桜漬けは、満開状態の桜ではなく、花が開ききっていない五分咲き頃の花を採取し、萼を取り除き、塩と梅酢で漬け込んで作るそうです。

結婚式でよく出てくる桜湯は、この桜漬けをお湯に入れたものです。

ものの本によりますと、結婚式で、お茶の代わりに桜湯が出されるのは、お茶はその場を取り繕ってごまかす意味の「お茶を濁す」に通じることから、出すことが憚られるため、代わりに「花が開く」桜湯が用いられるようになったとのこと。

でも、昔は、桜湯は、こうした縁起を担ぐ場所では出されないのが普通だったようです。紅桜は、散り際に色が褪せることから、「桜ざめ」と言われ、気持ちが冷めることに通じるとされていたのです。

まあ、こういう言葉遊びによるジンクスみたいなものは、実態がないだけに、どうとでも言えるのですね。

私は、どちらでも美味しければいいと思っていますので、時々買ってきては、桜湯にしてみたり、市販のアンパンに穴を開けて桜漬けを刻んで突っ込んで食べたりしています。



さて、桜漬けにする「関山桜」ですが、私は、仙台勤務時代、宮古を訪れたとき、関山桜の大変美しいのに出会ったことがあります。

浄土ヶ浜近くの小高い丘の公園で咲いていた関山桜。

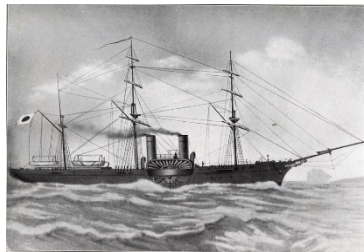
宮古湾を見渡すことができる公園には、宮古湾海戦の碑が建てられていました。

宮古湾海戦？

宮古湾海戦なんて聞いたことがないと言われる方が多いと思いますが、

これは、明治2年3月25日の未明、旧幕府海軍と新政府海軍の間で行われた我が国初の近代海戦で、宮古湾内にいた新政府軍の最新鋭艦「甲鉄」を奪取すべく、旧幕府軍の戦艦「回天」が単艦急襲したものです。

下の写真左は、新政府軍の甲鉄、右は旧幕軍の回天。



旧幕府軍の回天に乗り込んでいた幕府軍指揮官は、新撰組副長土方歳三。

戦いは、「回天」を「甲鉄」に接舷させ、斬り込むという接舷攻撃がとられたのですが、二つの艦は舷側の高さが違い、甲鉄からのガトリング銃の威力の前に、敢えなく攻撃は失敗するのです。

このとき、「甲鉄」の隣にいた新政府軍側の軍艦「春日」には、後の日本海海戦の最高司令官「東郷平八郎」が三等士官として乗り込んでいました。

歴史上の邂逅ですね。

二人が顔を合わせて、斬り結んでいた、なんて想像すると、ワクワクしますが、この二人の写真像が海戦の碑の傍にありました。

今回の津波は、この丘にまでは及ばなかったと思いますが、この丘から見えた美しい光景は、きっと一変しているに違いありません。

また、いつかの春に、あの丘に登って、桜の花の下で、宮古の町を眺めてみたいと思います。

#### 4.16 姥桜

私が勤めている仙台の学校でも、新学期が始まりました。

新しく入学したての学生たちは、小学生ほどとは言いませんが、どことなくピッカピカの一年生という雰囲気漂わせているから不思議です。

昨日は、新学期二回目の授業だったのですが、キャンパスでは桜が満開になって、私にとっては今年二回目のお花見です。

東北に通う仕事を持つと、毎年何回かの花見が楽しめますが、桜の後も、桃の花、藤の花、林檎の花としばらくの間花の季節が続き、仕事か花見かどっちが目的かわからない通勤が楽しめます。

昨日の仙台は東京と比べてかなり寒かったため、夜桜は、花冷えの闇のなかでの花明かりという風情です。

こう寒いと、ビールより暖かいおでんか鍋を食べたくなるから不思議です。鍋と言えば、東北では「桜鍋」を食べたことはありませんね。

ん？

桜鍋ってなにかって？

桜の花を鍋に浮かせる？

いえいえ、長野や熊本の方は先刻ご承知と思いますが、馬肉のすき焼きのことですね。

東京でも、深川や吉原で食べることができるので、私も時折行くのですが、

「みの家」さんとか「中江」さんとか、創業 100 年を超えているから、今では老舗と言えますかね。

馬肉のことを「さくら」と呼ぶことは、よく知られていますが、謂われは諸説あって、私が一番納得しているのが、山桜説。

日本古来の桜の花には、花が咲く前に葉がでるものと葉が出る前に花が咲くものがあることはご存じかと思います。

山桜の場合は、花が咲く前に赤っぽい葉がでるのですね。

花より先に葉が出るところから、「鼻より先に歯が出る」つまり馬だというわけです。

さざなみの 志賀の都の 山桜 花より先に 葉が出でにけり  
という具合ですかね。(ちなみにこんな歌はありません)

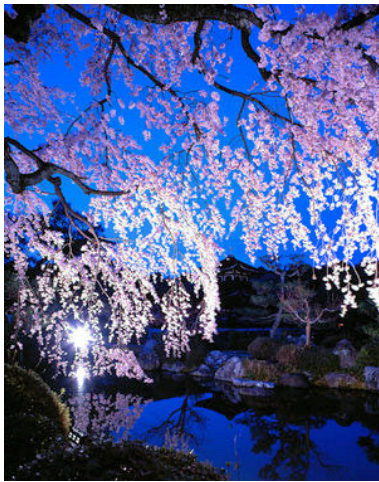
これ、間違うと、出っ歯、出歯亀と連想が続きかねませんので、ご注意のほど。

ところでね、葉より先に花が咲く桜で有名なのはなんといっても「染井吉野」。  
でも、「染井吉野」さん、桜の世界では、江戸期に生まれた新参者。  
しかも、ハーフですから、世間ではともかく、芸術の世界では肩身が狭い。

古来、花が葉より先にでる桜と言え、ば、「彼岸桜」ですね。  
これは、桜のなかで、最も美しく、「紅枝垂れ」なんかは、江戸彼岸桜の代表選手で、そこ  
はかたない色気があって、溜息が出ますね。

清水へ 祇園をよぎる 桜月夜 今宵会う人 みな美しき

というのは与謝野晶子の有名な歌ですが、  
この桜も紅枝垂れなんですね。



染井吉野は、色が白いので、夜桜としては、少し寒々しいのですが、花篝りに照らされた  
紅枝垂れは、絶世の美女を彷彿とさせます。

さて、この彼岸桜、別名を「姥桜」と言いますが、いつの頃からか、どこかのバカがその  
意味を間違ったために、年老いた女の人の意味で使われるようになっていきますね。

本当は、葉よりも先に咲く桜花という意味で、葉のない桜花、つまり「葉なし」→「齒な  
し」→「姥」。

女性に喩えると、彼岸桜のような美しい、娘にはない、そこはかたない色気を漂わせる女  
性のことですね。

最近では、「美魔女」と言うんだそうですが、「姥桜」というのは、娘盛りを過ぎて、なお、  
男心を迷わせる美しさを持っている女性のことを指すのが本当の意味ですね。

ということで、今は、桜の世界でも、ハーフの混血美女の時代。日本古来種の山桜も彼岸  
桜も、苦難の時代です。

ところで、鍋と言えば、私の家の庭で「牡丹」が咲きました。  
こちらは、ご承知の通り、猪肉ですね。

ついでに、秋には「紅葉鍋」。こちらは、鹿の肉です。  
ご存じでしたか。

日本人って、美しいものは、なんでも鍋にしてしまうのですかね。

#### 4.14 道灌と山吹

お隣の庭で山吹の花が咲き始めました。

山吹の花というと、すぐ私たちは、太田道灌の話を思い浮かべてしまいます。

鷹狩りに出て雨に降られた道灌クンが農家で蓑を借りようとしたところ、その娘から山吹の花の一枝を出されて怒って帰り、家臣からそれは古歌にいう「みのひとつだに」無いのが悲しいという意味だといわれ、反省して歌の道に志したというあの話です。

これ、江戸中期の儒学者、湯浅常山の「常山紀談」の中にある「太田持資歌道に志す事」の話なのですが、例によって、何にでも？をつけたがる私としては、この話、うまくできすぎていて非常に胡散臭い感じがするのです。

まず、関東の片田舎の農家の娘、しかも蓑も持っていないような貧しい農家の娘がどうしてこんな和歌を知ってたのって思いませんか？

常山紀談を見ると、

「太田左衛門大夫持資は上杉定正の長臣なり。

鷹狩りに出て雨に逢ひ、ある小屋に入りて蓑を借らんといふに、若き女の何とも物をば言はずして、山吹の花一枝折りて出しければ、「花を求むるにあらず」とて怒りて帰りしに、これを聞きし人の、『それは七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しきといふ古歌のこゝろなるべし』といふ。持資驚きてそれより歌に心を寄せけり。」

とあります。

「貧しい農家の娘」なんて書いていないのですね。

誰ですかね、勝手に「貧しい」とか「農家」とか決めつけているのは？

それに、相手は少なくとも領主でしょ。

領主相手に、ものも言わずに、山吹の枝を差し出すなんて、おかしいと思いませんか？

以前、小机城趾の話をしたとき、道灌クン、実は非常に執念深くて、険のあるイヤな性格だったと推測されると書いたのですが、領民が領主のこの性格を知らないわけもなく、普通だったら無礼者！って斬られちゃいますよ。

無事だったのは、鷹狩りで獲物を沢山仕留めてウハウハだったのか、この女の人が大変美しくメロメロになったか、どっちかだと思いませんか？

さてここで、私の得意な妄想。

鷹狩りの後に立ち寄ったのは、ホントは、かねてから綺麗な娘がいると聞いて、目をつけていた部下の館。

当然、武家の娘、それなりの教養はあるから、山吹の歌を知っていてもおかしくはないのですね。

山吹の枝を受け取った道灌クン、「そうかそうか、蓑はないか、じゃあ、今日は泊めてね」って、泊まっちゃったんですね。

つまり、山吹は、「今日は泊まるぞ。」「ええ、お待ちしていました」なんて生々しいやりとりをする代わりにのちょっとした小道具だったのですね。

え、妄想が過ぎるって？

いえいえ、そんなことは無いのです。

その証拠に、後に、道灌クン、彼女を、自分の和歌の勉強の相手という名目で、江戸城に招いて、ちゃっかり側室にしているのですから。

ちなみに、この女性、名前は「紅皿」と言いまして、継母とその娘からいじめられていたというシンデレラ物語があるのですが、その話はまた別の機会に。

さて、山吹の元歌は、醍醐天皇の皇子である中務卿兼明親王が詠んだもので、後拾遺集の中にあります。

そのまま引用しますと、次のような詞書がついていて

「小倉の家に住み侍りける頃、雨の降りける日、蓑借る人の侍りければ、山吹の枝を折りて取らせて侍りけり、心も得でまかりすぎて又の日、山吹の心得ざりしよし言ひにおこせて侍りける返りに言ひつかはしける。」

(拙訳)

(嵯峨の小倉山に住んでおりました頃、雨の降った日に来客があつて、帰りに蓑を借りたと言われてましたので、山吹の枝を折って持たせたのですが、その人は不審に思ったのか、何日か経って、山吹をいただいた意味が解りませんと言ってきたのに対して、その返事に次のような歌を届けました。)

なゝへ八重 花は咲けども 山吹の みのひとつだに なきぞあやしき  
となっています。

アレッ、「かなしき」じゃあないの？

ホントは「あやしき」なんですね。これ「不思議」という意味。実が一つも成らないのはどうしてなんでしょうねってトボケて言ってるんです。

江戸時代に「かなしき」にしちゃったんですね。

どうしてって？

江戸庶民には、この方がわかりやすく、うけるでしょ。

#### 4.15 一重の山吹…面影草

山吹は、英語では、「ジャパン・ローズ」と呼ばれていますが、この名前からわかりますように、一重の山吹は日本原産の花です。

山吹の花には、一重と八重の二種類あって、実がならないのは八重のもので、一重のものには実がなるのです。知ってますよね。

余り詳しくないのですが、八重咲きは、めしべやおしべが花びらに変わったもので、生殖能力がないか乏しいようで、生殖能力がない八重咲きは一代限りのようです。



な、へ八重 花は咲けども 山吹の みのひとつだに なきぞあやしき

先日の太田道灌の話の元になったこの兼明親王の歌も、八重の山吹に実がならないことを簞とかけているのですが、有名な割には、どこか言葉遊びのようなところがあって、歌として決して良いものとは思えませんね。

歌のせいかも知れないのですが、私は、一重の山吹の方が好きですね。  
私が山吹の歌を挙げるなら、断然、高市皇子のこの歌。

山吹の 立ちよそひたる 山清水 汲みに行かめど 道の知らなく  
(山振之 立儀足 山清水 酌尔雖行 道之白鳴) 万葉集 2-158

(拙訳)

(清らかな山の清水のほとりに咲いている美しい山吹の花のようだったあなた。もう一度でいいから会いたいとこんなに思っているのに、黄泉への道がどうしても、どうしても見つからないのです。)

この歌は、高市皇子が十市皇女の急死を悼んで詠った三種の歌の一つ。

山吹の黄色と清水の泉を詠むことで、彼女が死んで黄泉の国に去った無念を詠んだものです。

古代史に詳しい方はご存じかと思いますが、  
十市皇女は、天武天皇と額田王の間に生まれた皇女。  
高市皇子は、天武天皇と尼子娘の間に生まれた皇子。  
二人は、幼い頃から互いに惹かれあう仲だったようです。

しかし、無情なことに、十市皇女は、天武天皇の兄天智天皇によって天智の子大友皇子の妃にさせられてしまいます。引き裂かれた二人の悲しみは、いかばかりだったでしょう。

さらに、天は、二人に苛酷な運命を与えます。  
天智天皇の死後、起こった壬申の乱で、二人は敵味方になります。  
十市皇女は、夫、大友皇子が率いる近江朝廷方。  
高市皇子は、父、大海人皇子（天武）軍を率いる将軍。  
父と夫との板挟みになった十市皇女を想いつつ、攻撃をしなければならなかった高市皇子。  
運命とは言え、歴史に翻弄された二人。

壬申の乱後、二人にはやっとな誰にも遮られない一刻が到来するのですが、天武朝の立役者の高市皇子と近江朝の流れを汲む十市皇女との接近は、天武の妃、鸕野皇女（後の持統天皇）にとっては、目障り以上のものだったに違いありません。

二人は、再び仲を裂かれ、十市皇女は、未婚ではないにもかかわらず、大和の泊瀬倉梯宮の齋宮として派遣されることになります。

天武7年4月7日（678年5月3日）、倉梯宮へ出立の日。この日に十市皇女は急死するのです。

日本書紀は、「未だ出行するに及ばざるに、十市皇女卒然に病発り、宮中に薨りぬ。」と記し、父天武と母額田王は、声を上げて泣いたと書いているのですが、彼女の死の原因について何も語りません。

今に至るまで、彼女の死を自殺あるいは暗殺だったのではと考える人が多いのです。

先の歌は、みまかった十市皇女を思う高市皇子の血を吐くような想いの歌なのです。

「花咲きて 実成らずとも 長き日に 思ほゆるかも 山吹の花」  
（花咲而 實者不成登裳 長氣 所念鴨 山振之花）（万葉集 10-1860）  
（拙訳）

（私たちの仲は、遂に実らなかったけれど、いつも、いつまでも、私は、山吹の花のようだったあなたのことを思い続けています。）

この歌は、読み人知らずとされているのですが、私には、十市皇女に先立たれた高市皇子の歌のような気がしてなりません。



この二つの歌に比べて、七重八重の歌のなんと薄っぺらなことか、私にはどうしてもそう思えてしまうのです。

その昔、別れる運命にあった相愛の男女が、再会を誓ってお互いの面影を映した一对の鏡を土に埋めるのですが、そこから生えたのが一重の山吹の花、という伝説が伝えられています。

一重の山吹の花には「面影草（おもかげぐさ）」という悲しい別名があるのです。